

原 著

# ミトンが患者に与えていた影響 —高齢者の残存能力の向上を目指して—

佐渡総合病院、6階病棟；看護師

仲 沢 久美子、遠 見 るみ子、土 屋 まゆみ

身体拘束の一つであるミトン型手袋の使用が患者に与える影響をミトンをはずすことでの患者の変化に学び、慢性期の高齢者への関わり方を考察した。

キーワード：拘束 精神活動 残存能力

## 緒 言

当病棟では、高齢で意識障害のある患者の、誤嚥性肺炎予防など身体の安全を確保する観点から「やむを得ないもの」としてミトンを使用していた。しかしミトン使用により、爪の脱落、手掌のただれなど手のトラブルがあったため、ミトンによる拘束が患者に与えていた影響を考慮し、外すためにはどのようなケアが有効なのか事例より検討した。その結果、ミトンは身体の局所だけでなく、残存機能の低下や精神活動の低下など患者の全体に影響を及ぼすことがわかった。そしてミトンを外す関わりとして寝たきり状態から座位へ、病室のみでなく食堂で過ごす等活動範囲を広げ環境に変化を与える関わりを行なった。それにより視線を合わせるようになったり、一言返答など患者の精神活動状況に良い変化を得ることが出来た。

今回、ミトンが患者に与えていた拘束の影響を知り、慢性期の高齢者への関わり方を学ぶことが出来たので報告する（1～6）。

## 対 象 と 方 法

### I 研究目的

ミトンが患者に与えていた影響を明らかにし援助のあり方を考える。

### II 用語の定義

ミトン：介護用フドー手袋でミトン型手袋、ミトンと略す。

### III 研究方法

対象：H14年7月入院中のミトンを使用している重度の寝たきり状態にある患者4事例

期間：H14年5月23日～H14年12月

方法：ミトンを外す為に行なった援助方法及び結果を考察する。

倫理的配慮：対象患者、家族に研究目的、内容を説

明し承諾を得た上で開始した。

## IV 事例紹介及び援助の実際（表1参照）

### 結果（表1参照）

気管カニューラ及び胃管カテーテルなどを視野外にし、手の届かない所にセットする。

皮膚損傷予防の為爪を整え、皮膚の露出を最小限にする。訪床時、援助時に必ず明るく好意的な呼びかけを行なう。車椅子での散歩や食堂で経管栄養を行ない、行動範囲を拡大し周囲への関心を向ける。

### そ の 結 果

- 1 ミトン使用せず、装着中のカテーテル類等の自己抜去、皮膚損傷は4事例全員に生じなかった。
- 2 呼びかけに対し、1～2ヶ月後には3事例で一言の返答、視線を合わせての頷きがあった。
- 3 1事例では雑誌のページをめくったり、周囲の患者さんに関心を向けるようになった。
- 4 1事例では手招きでスタッフを呼び「ありがとう」と感謝の意を表した。
- 5 60～90度のベットアップが4事例とも2時間以上出来るようになった。  
以上のように、精神活動及び身体活動に残存機能の拡大がみられカテーテル類の抜去はなかった。

## 考 察

オーダーが入らず意志疎通が困難と思われた患者が、次第に視線を合わせて頷いたり、「ありがとう」と感謝の意を表せたのは、看護者の日々繰り返し呼びかけが、患者にとって快適な刺激となった為、と思われる。人は発達過程において獲得した課題が、本質的に失われることはないと言われている。今回、看護者が明るく、好意的に繰り返し姓を呼びかけ周囲の状況などを説明しながら援助行動をしたことが、エリクソンの発達段階の第一段階である基本的信頼感を、患者が取り戻した結果であると考えられる。信頼感の獲得のなかで「信頼感とは、一つは他人に対する理にかなった信頼をいさぐという意味と、もう一つは自分自身が、信頼にあたいする存在であるとの感覚を含んでいる」と言われ、この自分に対する感覚は、他者との相

互性を含ませたものであるとも言われている。

経過のなかで患者の変化を得た看護師は看護のよさを感じ、達成感が得られたと共に、対患者関係においても親密性を得ることが出来た。この様に患者の精神活動の変化と看護師の援助の変化が相互的に良く関係し、より患者の精神活動に刺激となり変化となって表れたと考える。

従来、臨床において慢性期の高齢患者には清潔援助や合併症予防などの身体的ケアが基本となり、その身体的安全を守る為に、ミトンの使用を行っていた。久保氏は「抑制は言葉のペールに被われているが、つまるところ患者の自由を拘束すること。患者の安全を守る為に行なわれる抑制が、どれほど患者の人権を無視し、残存能力を弱めてきただろうか」と述べている(1)。

ミトンを外す為の関わりを行ってみて、患者の精神面や身体機能面において良い変化があったことから、ミトンによる影響は手などの一部分ではなく、全身の残存能力も低下させていたということが言える。繰り返しベットアップや車椅子移乗、又他患との触れ合いや環境面に変化をもたせたことで、徐々にベットの角度のアップや支持座位時間の延長がはかれた。そして上肢や手指の機能も、目的を持った行動へと回復が出来てきた。座位は活動するための出発点であり、座位をとることによって視野が大きく広がり周囲の環境からの刺激を多く受け、精神的な活動性も高まると言われている。この様にミトンを外す関わりが精神面、身体面の残存能力の拡大向上に作用したと思われる。

老年者は老いの過程にあるに違いないが、障害を持っていても残存能力の回復への可能性は失われてはいないのである。慢性期にある高齢者の残存能力に対し、維持することに視点を持つことが多かった。しかし、看護師の積極的な関わりにより残存能力の回復がはかれたことで、慢性期の高齢者の可能性、すなわち、その人らしい生活が送れるための援助に視点もち、質向上に関わっていかなければならないと考える。

## 結 論

- 1) ミトン使用は手のトラブル等、局所だけでなく残存機能の低下や精神活動の低下など、患者の全体に影響を及ぼしていた。
- 2) 慢性期の高齢者を回復の可能性がある人であると認識し、生活空間を広げる関わりを繰り返す事が残存能力の向上、生活の充実感に繋げられる。

## 文 献

- 1) 久保成子：看護教育 医学書院 36(12) 1134 1995
- 2) 厚生労働省：「身体拘束ゼロへの手引き」インターネットより
- 3) 中島紀恵子：系統看護学講座専門 19 山田律子 老年看護学 医学書院 2001
- 4) 宮本美枝子：看護学雑誌 医学書院63(9) 1999
- 5) 山田一郎：系統看護学講座基礎10 看護科学 医学書院 27 1995
- 6) 紙屋克子：EBNURSING 中島書店 3(2) 2003

## 英 文 抄 録

Original article. Influence of a pair of mittens, bi-forked gloves, on a patient —for extracting a remaining ability from an elder patient—

the 6th ward, Sado General Hospital; nurse  
Kumiko Nakazawa, Rumiko Toh-mi, Mayumi Tsuchiya

We studied an effect of a pair of mittens, bi-forked gloves for preventing from removing a venous needle in a senior care, with comparing one's condition at putting on gloves to that at putting off ones. We considered a nursing attitude to a senior patients with chronic diseases.

Key word: mitten, gloved restraint, mental activity, remaining ability

表一 事例紹介及び援助の実際

	事例1	事例2	事例3	事例4
事例紹介	N氏 91歳 男性 病名 脳梗塞 肺気腫 慢性呼吸不全 在宅酸素使用中	A氏 87歳 女性 病名 脳梗塞後遺症肺炎	K氏 90歳 女性 病名 脳梗塞	S氏 92歳 女性 病名 多発性脳梗塞
使用理由	自宅ではヒモで拘束されていた。入院時から気切カニューラ自己抜去予防のため両手にミトン使用。	転入前から皮膚搔痒感の為、搔き傷防止に右手ミトン使用。	転入前から胃管カテーテル自己抜去予防の為、左手に使用。	転入前から胃瘻チューブの自己抜去予防の為、両手に使用。
意識状態	オーダー入らず意思疎通不能。声かけに瞬時に視線向ける時と向けない時がある。痰吸引時のみ苦顔呈する。	オーダー入らず意思疎通は困難。声かけに視線合い、追視もある。発声、発語はなし。	オーダー入らず意思疎通不能。声かけに全く反応なし。吸引時のみわずかに顔をゆがめる。	痴呆の為オーダー入らず。声かけに一言二言返答はあがるが会話は成立しない。
活動状況	重度の寝たきり状態。経管栄養でオムツ使用。終日ベット上の生活。両上肢屈曲拘縮あり。ミトンした手の動きで酸素マスクがぶっかり外れていることが多い。	重度の寝たきり状態。経管栄養でオムツ使用。終日ベット上の生活。左上下肢屈曲拘縮、右下肢の動きは活発。	重度の寝たきり状態。経管栄養でオムツ使用。終日ベット上の生活。右麻痺。左上肢、鼻に手がいく。	重度の寝たきり状態。経管栄養でオムツ使用。終日ベット上の生活で昼夜逆転傾向。両上肢の動きは活発。
ミトンを外す為の援助	<ul style="list-style-type: none"> <li>・気切カニューラ自己抜去可能な動きが取れるか、手指の動きを詳しく観察する。</li> <li>・手が当たってもマスクが外れないように小児用マスクに換える。</li> <li>・訪床時や援助時必ず声かけをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・爪を3日位毎に切り、ヤスリをかけ角をなくす。</li> <li>・右手が届く範囲の皮膚は露出しないようにする。左上肢はタオル等で覆う。オムツの中に手が入らないようにパジャマ式の病衣を使用し、上着の裾をズボンの中に入れる。</li> <li>訪床時や援助時必ず声かけをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・経管栄養中のみ抜去されないように観察を多くもつ。</li> <li>・経管栄養中は胃管カテーテルの位置を視界から外しベットアップ80~90度で座位保持をする。</li> <li>・テーブルをセットし手を置き座位を安定させ雑誌、外の景色を見せる等関心を他に向ける。</li> <li>・訪床時や援助時必ず声かけをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・経管栄養中はチューブを視界外、手の届かない所にセットする。</li> <li>・胃瘻挿入部は腹帯で保護し、Tシャツ着用しズボンの中に上着を入れ、容易に手が入らないようにする。</li> <li>・テーブル固定の工夫（二重のテーブル固定）</li> <li>・車椅子移乗し昼食は食堂で施行するなど他に関心を向ける。</li> <li>・訪床時や援助時必ず声かけをする。</li> </ul>
ミトンを外した後の変化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・可動域の観察の結果、以前の入院時よりも上肢の屈曲拘縮が進んでいる為、手指の動きがあっても気切カニューラ自己抜去はできず。</li> <li>・マスクを工夫することで外れる頻度が少なくなった。</li> <li>・1日1回60度のベットアップで2時間過ごす。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オムツ交換時のみ使用し、その他はミトンを外していた。</li> <li>・昼食は車椅子に移乗し食堂で過ごしたり、ベット上ではベットアップで過ごし周りを見回していた。</li> <li>・掻いてはいたが、搔き傷を作ることはなかった。</li> <li>・声かけに頷いたり「お早う」と一言返答が見られるようになる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・経管栄養中の胃管カテーテル抜去は見られなかった。</li> <li>・声かけに対し、うつろな視線を向けることから始まり、しっかりと視線を合わせ顔まで見られるようになった。</li> <li>・雑誌のページをめくったり、カーテンを開けて隣の患者を覗いたり、周りに関心が向けられるようになった。</li> <li>・1日3回30分~2時間ベットアップで過ごす。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・胃瘻チューブの抜かなかった。</li> <li>・手招きをしてスタッフを呼び、手を握ったり「ありがとう」と言ったりするようになった。</li> <li>・昼食時は車椅子に移乗し食堂で過ごしたり、1日1回ベットアップし雑誌を見る。</li> </ul>